



節句人形の

『素朴なギモン』コーナー

Vol. 76

市松人形

日本人形と聞いて、市松人形

を思い浮かべる人は多いと思います。黒髪のおかつば頭と可愛いらしい衣裳が特徴です。もともと市松人形は着せ替え人形で、以前は裸で売られているものも多かったといえます。男児の姿をした人形と、女児の姿をした人形があり、男児は羽織、女児は振袖姿が一般的です。愛玩用の人形として親しまれた市松人形について調べました。

.....
手に取って楽しんだ人形

現在では鑑賞用として飾られることが多い市松人形だが、元来は愛玩用の抱き人形であった。抱き人形は主に女性や子どもが抱っこして愛玩するもので、手足はある程度、動かせるように

なっている。

着せ替えて遊ぶ人形でもあり、かつては衣裳を着ていない「裸人形」も多く販売されていた。購入した人が着物の余り裂などで衣裳を作って着せていて、富裕層では贅沢な衣裳を揃えて着せ替えて楽しんだ。

1853（嘉永6）年に喜田川守貞が著した『守貞謄稿』は江戸時代後期の京都・大坂・江戸の風俗、事物を解説した百科事典である。そこには「胴は張り製、腕と股は白縮緬でつなぎ、首と手足が動くようにする。上製品は木彫りで自立もする。腹の笛を押すと鳴き声を発するものもある」と記されている。腰、膝頭、足首が折れるようになっていているものは三つ折れ人形と呼ばれ、市松人形の上製品である。

同書には市松人形の名について、寛保より宝暦頃に上方で人気のあった女形歌舞伎役者の佐野川市松の似顔人形が評判となり、そこから転じて、抱き人形の総称になったと書かれている。

関西では「いちまさん」という呼び名で親しまれ、江戸では人形と言えば、市松人形の姿を指すほど親しまれた。

今では「市松人形」という呼び名が定着しているが、明治から昭和初期にかけて東京では呼び名が定まっていなかったようで、子どもの姿をしていることから「小児人形」「子供人形」と表現されていたようだ。

親善人形として
日本を代表する存在に

明治以降も愛玩用の人形とし

て引き続き親しまれた。1927（昭和2）年にアメリカに「答礼人形」が贈られると、市松人形は日本人形を代表する存在となった。日本人形研究会が提唱した「やまと人形」という名が普及したが、戦後は古来の呼称である市松人形に戻った。製法が全て手作りであることから、市松人形は徐々に高額商品となり、そのため愛玩用ではなく、専ら鑑賞用となった。素材も変化した。子どもでも抱けるように軽くするため伝統的な桐製が主だったが、今は石膏が使われているものが多い。ただ、今でも伝統技法の桐製と胡粉を用いた市松人形があり、伝統工芸品として愛好家のコレクションアイテムともなっている。



市松人形（やまと人形）
吉徳資料室蔵